『アジア太平洋討究』No. 24（March 2015）

「復活新興国」フィリピンの挑戦

西 村　知[†]

Challenge of a 'Reviving New Economy': the Philippines and Beyond

Satoru Nishimura

The paper examines the economic trend of the Philippines, which have been once called as 'Sick man of Asia.' The Philippines are now performing a rapid economic growth, which is based on remittance by the OCWs（Overseas Contract Workers）and the investment of foreign capital on BPO（Business Process Outsourcing）such as call centers. Regarding OCWs, one thing to note is that Filipino workers are playing a very important role in modernization and globalization in some places in Pacific islands. We should notice that economic growth and positive social and political phenomena such as empowerment of women and political stabilization. However, the poverty and income gap issues are not yet solved in spite of good economic performance.

はじめに

近年，フィリピンは，政治的混乱，経済停滞からようやく立ち直り，大手投資銀行により，「NEXT11」に数えられる等，新たな「新興国」とみられつつある。本稿では，フィリピンの政治，経済，社会面の独自性に対する理解を深めることを通じて，これまで注目されてきた「新興国」群とは一線を画す量的，質的な発展パターンが存在することを，実証・理論研究によって明らかにする可能性について議論する。その中心的な研究テーマは，国外におけるフィリピン人の経済・文化的進出（「輸出されるフィリピン」）である。これらの諸要因の有機的関連性を考察することによって「新興国フィリピン」の潜在力と課題が明らかにされると考える。この考察は，最終的には，「新興国」への仲間入りを視野にいれている後発発展途上国に対して，経済政策や政治制度に対する政策的インプリケーションを得ることにつながる。

1.「復活新興国」フィリピンの現状

世界経済の中心がアジアに移行しつつあると言われて久しいが，そのアジアの中でもフィリピンは特にユニークな位置を占めている。そもそもフィリピン経済は1950年代まで日本に次ぐ所得水準と高い教育水準を誇るアジアの最優等生であったにもかかわらず，その後，特に1980年代以降成長の目覚しいアジアの近隣諸国とは対照的に，経済成長および貧困削減のいずれにおいても大きく後塵を拝し，「Sick man of Asia」などと揶揄されてきた（Daily Inquirer, Jan 23, 2013）。しかしながらリー

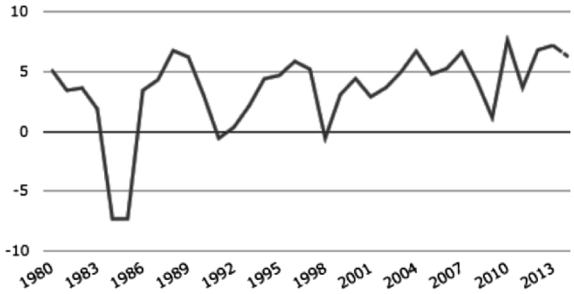
[†] 鹿児島大学法文学部教授・早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員，Faculty of Law Economics and Humanities

表 1　2013 年アジア諸国経済成長率（実質 GDP 成長率）

順位	国名	成長率(%)
1	モンゴル	11.74
2	ラオス	8.25
3	ミャンマー	8.03
4	中国	7.70
5	カンボジア	7.43
6	スリランカ	7.30
7	フィリピン	7.18
8	バングラディッシュ	6.07
9	インドネシア	5.78
10	ベトナム	5.42

出所　IMF World Economic Outlook Database

表 2　フィリピンの実質 GDP 成長率（%）の推移（1980–2014）



出所　IMF: World Economic Database

マンショック後の世界経済が停滞する中，フィリピン経済は相対的に良好なパフォーマンスを見せており，2013 年第 1 四半期の経済成長率では，アジアのトップに躍り出ている。2013 年全体でも実質 GDP 成長率はアジアで 7 位にランクしている（表 1）。大手投資銀行のゴールドマン・サックスによって，BRICs 諸国に次ぐ 21 世紀有数の経済大国に成長する潜在性があるとする 11ヶ国に数えられた（Goldman Sacks, 2007）。これが，本稿で，フィリピンを「復活新興国」と呼ぶゆえんである。表 2 が示すように，フィリピンの経済成長率は，2000 年代に入って安定した右上がりの曲線を示すようになっている。

2. 「復活」を可能としている要因：海外労働者・BPO

この経済成長を支えているのは，財の生産・輸出ではなく，海外労働者による送金，外資の BPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）などのサービス産業である。東南アジアにおいてもフィリピンの工業化率は比較的低水準である（Raquiza, 2014）。表 3 は，東南アジアの数ヶ国の工業部門の付加価値額の割合を指名したものであるが，他の国が，25%を超えているに対して，フィリピンでは 21%である。表 4 は，2008 年から 2012 年までの海外出稼ぎ労働者からの送金額と海外からの直接投資額を比較したものである。前者は後者の 7 倍から 13 倍となっている。フィリピンの経済成長にとって，「外資」よりも海外送金が重要なエンジンとなってきたのである。

表 3　東南アジア諸国における工業分門の付加価値の割合（%）

	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
インドネシア	13	16	21	24	28	27	25
マレーシア	22	19	24	26	31	28	25
フィリピン	26	25	25	23	24	24	21
タイ	22	22	27	30	34	35	36

出所　Raquiza（2014）

表 4　フィリピンの海外直接投資額と海外からの送金額（単位：百万米ドル）

年	海外直接投資(a)	海外からの送金額(b)	b/a
2008	1,436	18,628	13.0
2009	2,712	19,726	7.3
2010	1,635	21,369	13.1
2011	1,816	23,058	12.7
2012	2,797	24,641	8.8

出所　Raquiza（2014）をもとに筆者作成。

フィリピンでは，古くは 19 世紀末のハワイ・グアムなどへの農場労働者から，1970 年代以降の欧米への看護師等の専門職の派遣，1980 年代以降の中近東諸国への労働者（単純労働から専門職労働者までを含む），1990 年代以降の東南アジア諸国の発展に伴う家政婦や工場労働者，さらに最近では太平洋小島嶼国での専門職労働者など，世界経済の時々の地殻変動に応じてグローバルに人材を供給してきている。女性労働の観点からみると，1980 年代に入り，労働力が商品化され，フィリピン女性の介護やベビーシッターなど，再生産領域における移住労働はアメリカを始めとする先進国に拡大し，フィリピン国家財政の大きな収入源となっている。また世界中を航行する船舶の乗組員の大きな割合をフィリピン人が占めていることも知られているところである。表 5 が示すように，海外送金の受け取り額では，2010 年時点で，インド，中国，メキシコについで世界で第 4 位に位置する（UNCTAD）。フィリピンの GDP に占める海外送金の割合が非常に高いことも特徴的であり，表 5 に示された上位 15 ケ国のうち，レバノンの 21.07％に次いで高い，11.31％である。

3.「復活」過程における質的変化：「輸出されるフィリピン」・民主化・女性の社会進出

フィリピンの海外におけるプレゼンスの質的な変化として注目されるのは，太平洋島嶼国におけるフィリピン製品，フィリピン文化（映画，テレビ番組），フィリピン人の専門的職種への進出である。この地域では，フィリピンは，もはや，グローバル化におけるリーダー的存在となっている。いわば，「輸出されるフィリピン」という状況が展開している（Nishimura, 2013）。これまでは，フィリピンは，グローバル化の影響を受け，世界基準に包摂・吸収される側面ばかりが指摘されてきたが，昨今のグローバリゼーション研究における脱中心化したトランスナショナルなフロー（三尾裕子・床呂郁哉編，2012）などの指摘からも導かれるように，グローバル化現象の端的な先進事象として捉える視

表 5　2010 年の国別海外送金額および GDP に占める割合

Economy	Total remittances 2010	Total remittances Growth (%) 00-10	% of GDP 2010	% of GDP Growth (%) 00-10
India	55.00	5.32	3.39	0.79
China	51.00	8.05	0.87	2.21
Mexico	22.57	3.81	2.20	2.07
Philippines	21.31	3.66	11.31	0.09
Bangladesh	11.05	6.30	11.11	3.52
Nigeria	9.97	9.39	4.49	3.16
Pakistan	9.41	6.54	5.32	2.97
Lebanon	8.18	5.02	21.07	2.23
Egypt	7.68	4.37	3.58	1.34
Viet Nam	7.22	4.96	7.27	0.54
Indonesia	7.14	7.97	1.01	2.72
Morocco	6.45	3.71	7.09	0.23
Brazil	4.28	3.51	0.21	-1.31
Guatemala	4.26	6.84	10.36	3.63
Colombia	3.94	3.14	1.40	-1.11

Source: UNCTAD secretariat calculations, based on *UNCTADstat*

点が重要性を帯びてきている。この視点は，グローバル下で発展途上国が主体的に成長していくうえで重要である。太平洋島嶼国のフィリピンの経済・文化的な進出はこのような現象を考察する上での優れた事例である。

経済成長と並んで，最近のフィリピンの動向で特筆すべきことは，政治的安定と経済成長の関係である。近年は良好な経済成長率を示している国々も深刻な課題が指摘されている。特に新興国では，政治秩序の安定が最初の課題となる。例えば，インドネシアでは，民主化後の政治的な混乱を脱し民主政治が安定したことが，現在の経済発展の契機となった。逆にタイでは，政治的な対立の激化が経済活動の停滞をもたらす懸念材料となっている。フィリピンでは，民主政治の安定化と経済活動の活発化が同時に進行している。また，紛争が続いたミンダナオ地域の和平への動きは，豊富な天然資源の開発にも繋がり，フィリピン全体の経済成長を促すと期待されている。

さらに，注目すべきことは，国家が社会秩序を一元的に管理できない環境下において，特に貧困層において，非公式な制度が国家の法制度と競合・並存するという複数制度の状態が，社会のレジリエンスをもたらしている点である。この他に，援助マネーに支えられた NGO 活動の存在も重要である。

このような経済成長と政治的安定とならんで重要なのが，女性の社会的地位や国民の幸福感といっ

表 6　2014 年ジェンダー・ギャップ指標

Country	OVERALL Rank	OVERALL Score
Iceland	1	0.8594
Finland	2	0.8453
Norway	3	0.8374
Sweden	4	0.8165
Denmark	5	0.8025
Nicaragua	6	0.7894
Rwanda*	7	0.7854
Ireland	8	0.7850
Philippines	9	0.7814
Belgium	10	0.7809

出所　World Economic Forum

た質的な社会発展が進展していることである。一般に東南アジアは，東アジアや南アジアとは大きく異なりジェンダー格差が小さいといわれるが（Atkinson and Errington, 1990），フィリピンはその中でもとりわけその傾向が強い。例えば，世界経済フォーラムの「Global Gender Gap Report」によると，フィリピンは，2013 年の gender gap index（ジェンダー・ギャップ指標）において，世界で総合ランクは第 5 位（142 カ国中，日本は 104 位）であり，他のアジア諸国を大きく引き離している（表 6）。現在の開発を研究する経済学では，一人あたり GDP や HDI（人間開発指数）などの，従来の客観的な指標（所得，教育水準，寿命など）を用いるアプローチに加えて，個人の満足度を指標とする「幸福の経済学」（ブルーノ・S・フライ他，2005，ニック・ポータヴィー，2012）が注目されている。その中でフィリピンは，所得水準に対して例外的に高い国民の「幸福度」を示すことが実証研究で示されている（Stevenson and Wolfers, 2008）。米国の世論調査研究所，Gallup が 2014 年に 138ヶ国で行った調査によれば，フィリピンの幸福度は，13 位にランクした（Gallup.com 2014）（表 7）。フィリピンは，政治の安定，多元的民主主義，援助マネーに支えられて，資本，労働力の流れにおいて，高い経済成長，幸福度，女性の進出を達成している側面において世界的な先進性を有しており，これらが本稿においてフィリピンを次世代型の経済社会の発展型として注目しているゆえんである。

4.　残された課題：貧困問題

しかし，このような多面的，包括的な要因の展開に対して，所得分配の不平等度は依然アジアの最高水準を維持しており，更に近年の高い経済成長にもかかわらず，絶対貧困率は表 8 が示すように，2006 年以降，25％以上のほぼ横ばいのままである等，急速な経済成長の恩恵は貧困層に届いてはいない。この状況は，ジョブレス成長（Ramon, 2014）とも形容されている。即ち，アジアの成長国としての面と，遅々として進まない貧困削減等の面が共存している。海外労働，サービス産業，政治的安定を誘因とする現在のフィリピンの政治経済，社会が新しい発展のパターンを示すことができるかどうかを検証するには，これらの政治，経済，社会の現象の好循環を示すとともに，貧困問題といった持続的・構造的な問題に変化がおこるかどうかを理解する必要がある。

経済成長，民主化が進み，女性が進出する国でなぜ，貧困率が下がらないのであろうか。なぜ，雇

表 7　2014 年幸福度指数

	Score
Paraguay	87
Panama	86
Guatemala	83
Nicaragua	83
Ecuador	83
Costa Rica	82
Colombia	82
Denmark	82
Honduras	81
Venezuela	81
El Salvador	81
Indonesia	80
Philippines	80
Thailand	80
United Arab Emirates	79
Canada	79
New Zealand	79
Australia	79
Chile	78
Argentina	78
Taiwan	78

出所：gallup.com

表 8　フィリピンの貧困率

	2006	2009	2012
貧困率(%)	26.6	26.3	25.2

出所　NSCB, Philippines

用が拡大しないのであろうか。あるいは，インフォーマルな所得分配が進み，統計上に現れる貧困者の生活水準はそれほど低くないのであろうか？　難解な問題が山積している。

5. 「復活新興国」の分析手法

このような難解なフィリピンの貧困問題を捉えるには，多角的なアプローチを持った研究は多分野の多人数による研究グループが有効的である。まず，フィリピン社会経済，政治，文化の特徴を既存研究の整理，統計データを用いて国際比較，時系列分析によって明らかにすることが重要である。次に，これらの特徴が生まれる要因や過程を，主にフィールドリサーチによって明らかにし，各研究分野から理論的に整理する必要がある。各々が従来から重点的にフォーカスをあててきたテーマを中心として，必要に応じて他国との比較をあらたに明示的に加えつつ，それらのテーマをフィリピンの独自性という観点から再整理することも重要である。最終的には，それらのテーマを総体的に組み合わ

せることにより，フィリピンを中心とした分析から「新興国」の課題を明確化するとともに，新たな経済発展モデルを構想することが可能となる。

6. 「復活新興国」フィリピンを研究することの意義

発展途上国の発展過程を，経済，政治，社会，文化の諸側面を総合的に捉えることによって，学際的，質的に捉えようとするアプローチによって，フィリピンの現状と課題を比較研究の視点を重視し，経済発展モデルや貧困削減，民主主義の定着や経済と国家，グローバル化の中での文化やジェンダーといった社会科学の最も論争的な問題の解明に貢献することが可能となる。次に，フィリピン研究から小島嶼研究への視角を導き出すことができる。例えば，カリブ海小島嶼国では，労働力の流出と合わせて外国人労働力の流入に関しても注目が集まっている。誰のための経済発展かという問題である（Lewis-Ambrose, 2014）。フィリピンのオセアニア小島嶼国への進出の問題は，一国レベルのみならず受け入れ国を含めた複数の国との関連性を議論することによって，ナショナル，グローバルな適応の問題の本質が浮き彫りになる。

フィリピンは，グローバル化における経済，社会の発展を量的・質的，内の視点・外からの視点から捉える上で非常に優れたフィールドであると言える。

参考文献

Atkinson, M.Jane and Errington,Shelly（1990）Power and Difference: Gender in Island Southeast Asia. Stanford University Press.
ブルーノ S. フライ他（2005）『幸福の政治経済学―人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社.
Goldman Sachs（2007）Goldman Sachs study of N-11 nations, Global Economics Paper No: 153.
三尾裕子・床呂郁哉編（2012）『グローバリゼーションズ：人類学，歴史学，地域研究の現場から』弘文堂.
ニック・ポータヴィー（2012）『幸福の計算式』CCC メディアハウス.
Nishimura, Satoru（2013）Socio-Economic Influence of Filipino workers in the Federal States of Micronesia. Occasional Papers（Research Center for The Pacific Islands, Kagoshima University）, no. 53, pp. 61–69.
Ramon G., Jose, Albert（2014）Is Growth Really Jobless? Philippine Institute for Development Studies（Published Policy Notes）.
Stevenson, Betsey and Justin Wolfers（2008）Economic Growth and Subjective Well-Being: Reassessing the Easterlin Paradox. NBER Working Paper No. 14282.

ワークショップ・学会報告

Pugh, Jonathan（2014）Being exile at home: what is ‘Caribbean Development’（ISISA Islands of the World XIII, September 24, 2014 in Penghu, Taiwan）
Raquiza, R. Antoinette（2014）The Philippine Economy in Transition（Workshop Prospects for living in Global World: ‘Human-Oriented Development’ and Political Stabilization in the Philippines and Beyond. November 1, 2015 於：鹿児島大学東京リエゾンオフィス）

新聞

Daily Inquirer, Jan. 23 2013.

ホームページ

http://www.gallup.com（GALLUP: 幸福度指数）
http://reports.weforum.org（World Economic Forum: ジェンダー・ギャップ）
http://www.nscb.gov.ph/poverty（フィリピン政府 NSCB，貧困率）